■出演者プロフィール

©Prague Spring - Ivan Malý

指揮：小泉和裕 Kazuhiro Koizumi, *Conductor*

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。これまでにベルリン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、フランス放送フィル、ロイヤル・フィル、シカゴ響、ボストン響、デトロイト響、シンシナティ響、トロント響、モントリオール響などへ客演。新日本フィル音楽監督、ウィニペグ響音楽監督、都響指揮者／首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者／音楽監督、日本センチュリー響首席客演指揮者／首席指揮者／音楽監督、仙台フィル首席客演指揮者、名古屋フィル音楽監督などを歴任。現在、都響終身名誉指揮者、九響終身名誉音楽監督、名古屋フィル名誉音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者。

■オーケストラ・プロフィール

東京都交響楽団 Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra

都響 音楽監督 大野和士

【創　設】	1965年、東京オリンピックの記念文化事業として東京都が設立。
【指揮者】	大野和士（音楽監督）、アラン・ギルバート（首席客演指揮者）、 小泉和裕（終身名誉指揮者）、エリアフ・インバル（桂冠指揮者）
【ホーム・コンサート・ホール】	東京文化会館、サントリーホール、東京芸術劇場
【楽団ウェブサイト】	https://www.tmso.or.jp/

サマーミューザ特設サイト こちらからご覧ください。 https://www.kawasaki-sym-hall.jp/festa/

●アンコール曲　●ほぼ日刊サマーミューザ　●パートナーショップ特典

アンケート ご協力をお願いいたします。 https://gws-net.com/summermuza2024

ほぼ日刊サマーミューザに感想が載るかも？!

ミューザ川崎シンフォニーホール ホールスポンサー

ミューザ川崎シンフォニーホールの公演事業は、ホールスポンサーの皆様によって支えられています。

法人

【特別賛助会員】
川崎幸病院
川崎信用金庫
川崎フロンターレ
キヤノン株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ジェクト株式会社
三井不動産グループ

【賛助会員】
税理士法人あおぞら会計
株式会社イープラス
ENEOS株式会社
有限会社エムシーエス・デザインズ
神奈川臨海鉄道株式会社
川崎アゼリア株式会社
公益社団法人川崎市医師会
川崎市信用保証協会
公益社団法人川崎市病院協会
一般社団法人川崎市薬剤師会
川崎鶴見臨港バス株式会社
川崎日航ホテル
かわさきファズ株式会社
川崎臨港倉庫埠頭株式会社
株式会社きんでん
ケイジーケイ株式会社
京浜楽器株式会社
公益財団法人JFE21世紀財団
株式会社シグマコミュニケーションズ
セレサ川崎農業協同組合
大本山川崎大師平間寺
髙橋昌也税理士・FP事務所
株式会社デイ・シイ
東亜石油株式会社
株式会社東芝
ぴあ株式会社
ホテルメトロポリタン 川崎
ヤマハサウンドシステム株式会社
＊
大宮町町内会

個人

阿部孝夫
新井智彦
市橋信一郎
井上敏昭
宇佐美清一
遠藤智和
大越麻美子
大須賀徳也
大塚具幸
岡垣克則
小笠原 将
岡田 元
岡野 功
小倉ヒロ・ミヒャエル
小野洋彰
金山直樹
喜多紘一
木伏源太
久住映子
黒川裕子
小菅みつほ
後藤 実
小林知子
佐伯 昇
佐藤晴茂
杉山弘子
鈴木甚郎
鈴木 徹
関口 浩・三代子
髙井延幸
髙橋美子
竹内啓介
都築 豊
中村紀美子
西 洋子
西山英昭
長谷川喜代江
林 直人
廣瀬治昇
藤嶋とみ子
前田 泉
松嶋邦生
山内利夫
山下啓史
山田昌克
D.Y
M.C
N.A
T.Y
他匿名16名
敬称略五十音順

他1法人

（2024年6月10日現在）

FESTA SUMMER MUZA KAWASAKI 2024

MUZA KAWASAKI SYMPHONY HALL　20 YEARS MUZA KAWASAKI SYMPHONY HALL

川崎市市制100周年記念事業
ミューザ川崎シンフォニーホール開館20周年記念公演

川崎市　COLORS FUTURE! ACTIONS KAWASAKI 100th

フェスタサマーミューザ KAWASAKI 2024

ミューザ川崎シンフォニーホール

東京都交響楽団

Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra

円熟の小泉×都響 ～交響曲の王道～

8/1（木）

■ プレコンサート
18:20～18:40
※本公演と同じお席でお楽しみください。
※プレコンサート中の客席への入退場は自由です。

■ 開演
19:00

■ 終演予定
21:00

［プレコンサート］
フルート：小池郁江
ヴァイオリン：伊東翔太
ヴィオラ：石田紗樹
チェロ：伊東 裕
〈曲目〉
モーツァルト：
フルート四重奏曲第1番
ニ長調 K. 285

出演

指揮：**小泉和裕（東京都交響楽団 終身名誉指揮者）**
Kazuhiro Koizumi (Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra Honorary Conductor for Life), *Conductor*

コンサートマスター：**水谷 晃**
Akira Mizutani, *Concertmaster*

曲目

モーツァルト：交響曲第40番 ト短調 K. 550　〔26分〕
Mozart: Symphony No. 40 in g minor, K. 550
第1楽章　モルト・アレグロ
第2楽章　アンダンテ
第3楽章　メヌエット：アレグレット
第4楽章　フィナーレ：アレグロ・アッサイ

―休憩〔20分〕―

ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 op. 68　〔45分〕
Brahms: Symphony No. 1 in c minor, op. 68
第1楽章　ウン・ポーコ・ソステヌート ― アレグロ
第2楽章　アンダンテ・ソステヌート
第3楽章　ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ
第4楽章　アダージョ ― ピウ・アンダンテ ― アレグロ・ノン・トロッポ、マ・コン・ブリオ ― ピウ・アレグロ

※演奏時間は目安です。
※出演者・公演内容につきましては変更が生じる場合がございます。

皆様にコンサートをお楽しみいただくために、ご協力をお願いいたします。　館内では咳エチケット、適切な手指消毒を推奨しております。

- 開演中は、携帯電話・スマートフォン・タブレット端末など音や光を発する電子機器の電源をお切りください。
- 時計のアラーム・時報などは設定の解除をお願いいたします。
- ハウリングの発生を防ぐため、補聴器などが正しく装着されているかご確認ください。
- 演奏中の入退場はご遠慮ください。（プレコンサートを除く）全席指定の公演です。ご自分の席でお聴きください。
- 許可のない写真撮影・録音・録画は固くお断りいたします。（カーテンコール時を除く）
- 演奏中に音が出ないよう十分ご注意ください。（鈴のついたお手荷物・飴の包みを開ける際の音など）
- 演奏中の会話はお控えください。ブラボーなどの声援をされるお客様は、マスク着用を推奨いたします。
- 曲が終わったとき、音が消えゆく余韻を十分に味わってから拍手・ブラボーなどの声援をお送りください。
- 客席内での飲食はご遠慮ください。

終演後のカーテンコールの撮影が可能です。　撮影は自席にご着席のまま、周りのお客様へご配慮いただきますようお願いいたします。

※前半終了時、アンコール演奏中は撮影いただけません。　※撮影前にフラッシュ設定が「オフ」になっているかご確認ください。　※目線より高い位置での撮影や、スマートフォン・携帯電話以外のカメラでの撮影、自撮り棒の使用はご遠慮ください。　※SNSなどに投稿する際は、ほかのお客様の映り込みにご注意ください。

主催：川崎市、ミューザ川崎シンフォニーホール（川崎市文化財団グループ）
後援：川崎市教育委員会、公益社団法人 日本オーケストラ連盟、J-WAVE 81.3FM、TBSラジオ
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）｜独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁　音楽のまち・かわさき

ドラマティックな独墺交響曲の代表作2つ
人気の短調交響曲の共通性と相違点を体感する

文＝柴田克彦

独墺短調交響曲の真髄を実感する

「モーツァルトの40番」と「ブラームスの1番」。本日は、フェスタサマーミューザでは珍しいほどの“王道交響曲プログラム”だ。

両者に共通するのは、“ドイツ・オーストリア”音楽を代表する名作交響曲である点と、短調を基調としている点。さらには、モーツァルトの40番が「ロマン派を先取りした古典派交響曲」であり、ブラームスの1番が「古典派への視点を崩さないロマン派交響曲」である点も面白い。いずれにせよ今回は、史上屈指の人気交響曲の特質や魅力を、改めて見直す好機となる。

ロマン派を予見した、モーツァルトには稀な短調交響曲

モーツァルト：交響曲第40番

ウィーン古典派の天才ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）の三大交響曲の1つ。作曲者の交響曲創作の最後を飾る三大交響曲は、1788年6月26日に第39番、7月25日に第40番、8月10日に第41番が完成している。しかしながら、性格の異なる3曲が僅か2ヶ月ほどの間に完成された経緯は明らかになっていない。以前は「演奏のあてもなく、自己の芸術的な要請に基づいて作曲された」といわれていたが、現在では出版もしくはウィーンや旅行先での演奏など何らかの目的のために書かれたとの見方が一般的。また「生前には演奏されなかった」との旧説も、作曲直後の筆写譜や作曲者の書き込みのある演奏譜の存在等から、今ではほとんど否定されている。

第40番は、第25番と合わせてモーツァルトに2つしかない短調交響曲。彼の“宿命の調”ト短調を基調とするだけでなく、円熟期の深みを加えた哀切な曲想が聴く者を惹き付けてきた。この曲は、クラリネット2本を加えた第2版の存在から、生前に演奏されたことはほぼ確実。編成も特徴的で、ウィーン移住後に書かれた第35番以降の交響曲の中で唯一、トランペットとティンパニを含んでおらず、明らかに内省的な響きが企図されている。また、大胆な転調や半音階的な書法が生み出すダイナミックな緊張感は“デモーニッシュ”と形容され、時代を先取りしたロマンティシズムも指摘されている。

第1楽章は「ため息音型」による有名な第1主題と伸びやかな第2主題を軸に進行する。**第2楽章**は、半音階的な旋律が中心を成す、慰めに満ちた緩徐楽章。**第3楽章**は厳しさが漂う主部になめらかな中間部が挟まれる。**第4楽章**は転調を重ねながら展開される激情的な音楽。

重厚で雄大な、ドイツ・ロマン派交響曲の代表格

ブラームス：交響曲第1番

ドイツ・ロマン派の巨匠ヨハネス・ブラームス（1833～1897）が、20余年に及ぶ紆余曲折の末、1876年、43歳にして世に出した苦心作。破格に遅い年齢での第1番となった要因は、彼が生来もつ慎重さや自己批判の強さに加えて、ドイツの大先輩の存在にあった。「巨人（ベートーヴェン）が背後から行進してくるのをきくと、とても交響曲を書く気にはならない」。ブラームスはこう言って、ベートーヴェンの後に交響曲を作る必然性を問い続けた。そして、ひとつの解答として生み出したのが、古典的形式美とロマン的感性が見事に溶け合った本作である。

最初の構想は1855年頃といわれているが、20年もの間作曲を続けていたわけではない。まずは断続的に作曲し、1862年に第1楽章の原型を完成後また中断。1874年になって本腰を入れ、約2年かけて完成した。そして1876年11月カールスルーエにて初演され、当時を代表する指揮者でピアニストのハンス・フォン・ビューローから「ベートーヴェンの9曲に次ぐ“第10交響曲”」と賞賛された。

曲は、“苦悩から歓喜へ”というベートーヴェンが重んじた精神を受け継ぐ構成がなされており、ハ短調からハ長調に至る点も「運命」交響曲と同じだ。しかし、重厚さと歌謡性を併せ持った曲想や雄大な響きは、ブラームスならではの魅力に溢れており、聴く者にずっしりした手応えを与えてくれる。

第1楽章は、重く分厚い序奏から主部に移り、2つの主題を中心に緊張感を保ちながら進む。**第2楽章**は歌謡的で寂しさが漂う緩徐楽章。後半にはヴァイオリン独奏が美しさを醸し出す。**第3楽章**はブラームス特有の優雅な間奏曲風の音楽。**第4楽章**は劇的な遅い序奏で始まり、ホルンのフレーズで暗雲が晴れた後、テンポを速めた主部へ。流麗な主要主題に様々な動きを交えて突き進み、壮麗な盛り上がりをみせる。

column

「モーツァルトの40番」と「ブラームスの1番」の名盤案内

あまりに有名な本プロの2曲は、著名指揮者やオーケストラによる録音が数多く出されている。ここでは、両曲の特筆すべき名盤をご紹介しよう。ただし、モーツァルトとブラームスでは事情がやや異なる。

モーツァルトの演奏は、ピリオド楽器（古楽器）勢の台頭で大きく変化した。録音ではそれが特に顕著だ。しかしながら“往年の名盤”も一度は聴いておきたい。そこで、ワルター指揮ウィーン・フィル（1952年、ソニー）と、ベーム指揮ベルリン・フィル（1961年、グラモフォン）の両録音をあげておく。ロマンティックで凄絶な前者、端正で優雅な後者と質感はかなり違うが、共にモーツァルトを得意とした名匠の良き記録だ。ピリオド楽器勢では、アーノンクール指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス（2013年、ソニー）や、ブリュッヘン指揮18世紀オーケストラ（2010年、グロッサ）の評価が高いが、ここでお薦めしたいのは、最新のエメリャニチェフ指揮イル・ポモ・ドーロ（2023年、Polo）の録音。快速テンポによる迫真的な演奏で、第2楽章以下が弛緩しない点もいい。

一方ブラームスの1番は、曲の性格上、現代のモダン・オーケストラの生演奏を聴くのがベストかもしれない。とはいえ、フルトヴェングラー、ベーム、カラヤン（複数）、バーンスタイン等々、20世紀の巨匠が指揮した名盤も目白押し。ここはそれら以外の新旧の名演をあげておこう。以前から代表盤の誉れ高いのがミュンシュ指揮パリ管弦楽団（1968年、エラート）。重厚・濃密な演奏で高揚感も比類ない。比較的新しい録音では、ガーディナー指揮オルケストル・レヴォリューショネル・エ・ロマンティーク（2007年、SDG）。こちらは推進力抜群で引き締まった快演だ。

（柴田克彦）